

## 平成 29 年度 北九州市発達障害者支援モデル事業報告書

## 行動障害の予防における効果的な支援手法の開発

## I. 事業要旨

このプログラムの目的は、市内の福祉サービス事業所や教育関係者等が、講義や事例検討を通して行動障害のある発達障害者への支援方法を学び、現場に取り入れることによって、行動障害や二次障害を予防することである。

平成 26 年度及び 27 年度は、市内の事業所や特別支援学校の実践報告及びパネルディスカッションを行った。平成 28 年度は、事例検討を中心とし、行動障害のある発達障害者への支援方法について、参加者で協議し、共通認識を行う研修会を開催した。また、5 ヶ月後にフォローアップ研修会を行い、コミュニケーションに関する講義と、グループによる事例検討を行った。当日及び事後アンケート調査結果から、対応困難事例に対する効果的で具体的な支援方法を学ぶ研修会を望む声が多かったため、今年度も引き続き研修会を行った。

今年度は、行動分析に関する基礎講義と事例検討の演習にそれぞれ 1 日ずつ、また、参加者からの実践報告を行うフォローアップ研修会を半日行うようにした。

参加条件として、「発達障害や応用行動分析の基礎知識がある」市内の福祉サービス事業所や教育関係者とした。加えて、行動障害のある人に対する医療や感覚統合の基礎知識があることが望ましいとした。また、3 日間通して受講した参加者には、修了証書を発行するようにした。

研修会申し込みは 36 名、初日参加は 31 名、2 日目 32 名、3 日目 24 名であった。研修会当日と事後アンケート調査を行い、この研修会で学んだ内容を、どのように各現場に取り入れているか測定した。

初日の研修会直後のアンケート回収数は 30 であり、回収率は 96%であった。講義は、60%が「理解できた」、40%が「少し理解できた」と回答しており、参加者全員が行動分析の方法論を、概ね理解できたと思われる。2 日目のアンケート回収数は 32 であり、回収率は 100%であった。演習は、56%が「理解できた」、41%が「少し理解できた」と回答しており、参加者のほとんどが行動分析の実際の手法を、概ね理解できたと思われる。

3 ヶ月後の事後アンケート調査は、回収数 21、回収率 68%であった。その結果、学校や事業所の中で「取り組んだ」が 29%、「少し取り組んだ」が 33%あり、回答者の 62%がこの研修会後に参考になった取り組みを実施していることが分かった。実際に取り入れている内容は、「スケジュール」「視覚的支援」「トークンシステム」「ABC 分析」「視覚的刺激の制御」「レスポンスコスト」等であった。また、取り組んだ結果、学校や事業所の中で効果が「ある」が 46%、「少しある」が 46%であり、ほぼ全員が取り組みの効果を実感していることが分か

った。

その一方で、回答者の39%が研修会で学んだ内容をあまり実践しておらず、その理由として、対象者がいないこと、職員配置の問題、日々の業務に忙殺されていた等があがっていた。

フォローアップセミナーには、32名中24名の参加があった。コミュニケーションに関する講義と、協力児が利用している放課後デイサービス事業所の実践報告を行った。また、研修会3回全てに参加した受講者22名に、北九州市長名で修了証を発行した。

事後アンケート調査結果では、このような実践的な研修会を望む声が多くあったため、今後も研修会を継続することが必要である。また、研修会に参加した一部の職員だけが事業所で取り組むことは限界があるため、職員全体が共通認識を持つためにも、発達障害者支援センターの役割として、福祉サービス事業所に対する機関コンサルテーションを強化したい。

## II. 事業目的

市内の福祉サービス事業所や教育関係者等が、講義や事例検討を通して行動障害のある発達障害者への支援方法を学び、現場に取り入れることによって、行動障害や二次障害を予防することを目的とする。

## III. 事業の実施内容

平成29年10月15日(日)に講義、11月5日に事例検討を行った。(資料2-2)

効果検証に関しては、研修会当日(資料2-3、2-4、2-5)と3ヶ月後(資料2-6)にアンケート調査を実施した。また、フォローアップセミナーを、平成30年3月11日に実施した。(資料2-6)

## IV. 分析、考察

### 1. アンケート調査結果

#### ① 研修会初日のアンケート調査結果

研修会参加者に研修終了直後、記入してもらった。初日の研修会参加人数は31名、アンケート回収数は30、アンケート回収率は96%であった。

アンケート回答者の所属機関の内訳を、表1に示す。

表1 所属機関についてお尋ねします

	放課後等 デイサービス	教育機関	福祉サービ ス事業所	相談機関	入所施設	その他	合計
人数	10	2	8	1	5	4	30

アンケートの結果について、図 1 から図 2 に示す。

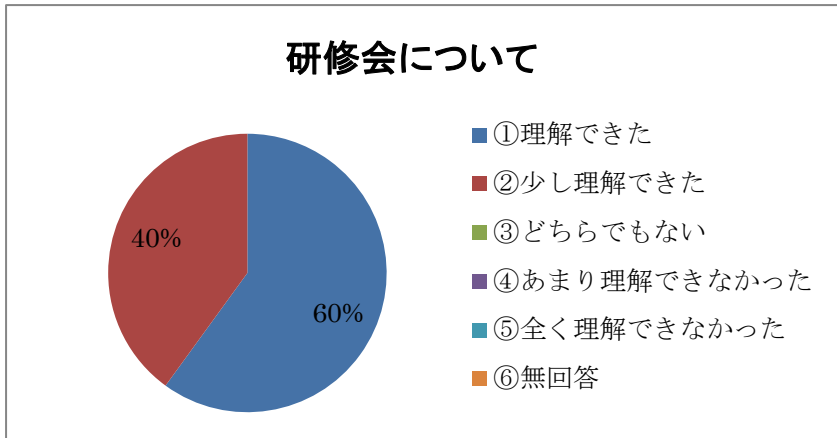


図 1 「今日の研修会はいかがでしたか」について

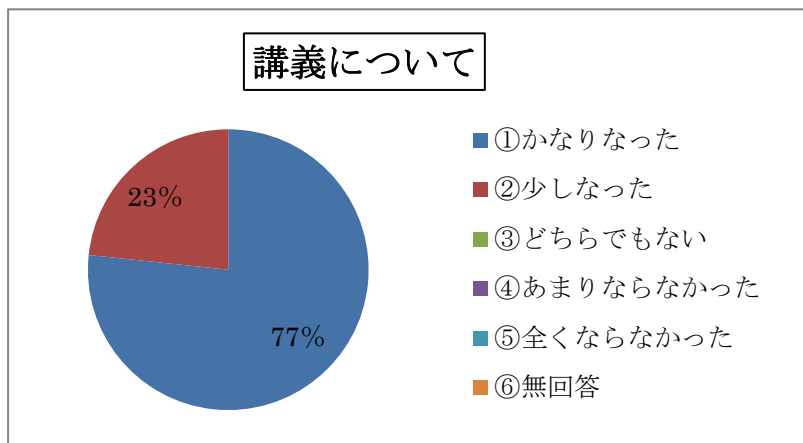


図 2 「今本先生の講義は参考になりましたか」について

図 2 の「今本先生の講義は参考になりましたか」の主な具体的な内容を以下に示す。

- ・問題行動は何かを行動の法則として原因を探ることで、何とかできるかもしれないとヒントを得られたことはとても良かった。
- ・行動問題の原因をシートにまとめることで、何がきっかけで問題行動が出てきてしまうのかが明確になったと思う。そのきっかけを 1 つずつ解決していくためには、やはりスタッフ間での統一の支援はもちろん、アセスメントや観察、記録も支援の手掛かりになると改めて感じた。
- ・行動には必ず意味、事象、原因などがあり、それを家族のとらえ方や支援の仕方が共有できるようになれば、お互い生きやすいようになるのではと思えることが沢山あった。
- ・ABC 分析を使うことで、理解や対応が共有・連携でき、エビデンスに基づく支援になるように思うが、一人ひとりの教育や経験が必要である。今後も何度もトレーニングを繰り返し、技術として獲得していきたい。

図1の結果から、60%が研修内容は「理解できた」、40%が「少し理解できた」と回答しており、参加者全員が研修会内容は概ね理解できたことが分かった。

図2の結果から、講師の講義で参考になった内容が、77%が「かなりあった」、23%が「少しあった」と回答している。そのため参加者全員が、今回の講義は、今後の支援に活用できる内容であると認識していることが分かった。

## ② 研修会2日目のアンケート調査結果

研修会参加者に研修終了直後、記入してもらった。2日目の研修会参加人数は32名、アンケート回収数は32、アンケート回収率は100%であった。

アンケート回答者の所属機関の内訳を、表2に示す。

表2 所属機関についてお尋ねします

	放課後等 デイサービス	教育機関	福祉サービ ス事業所	相談機関	入所施設	その他	合計
人数	14	1	10	1	2	3	32

アンケートの結果について、図3から図5に示す。

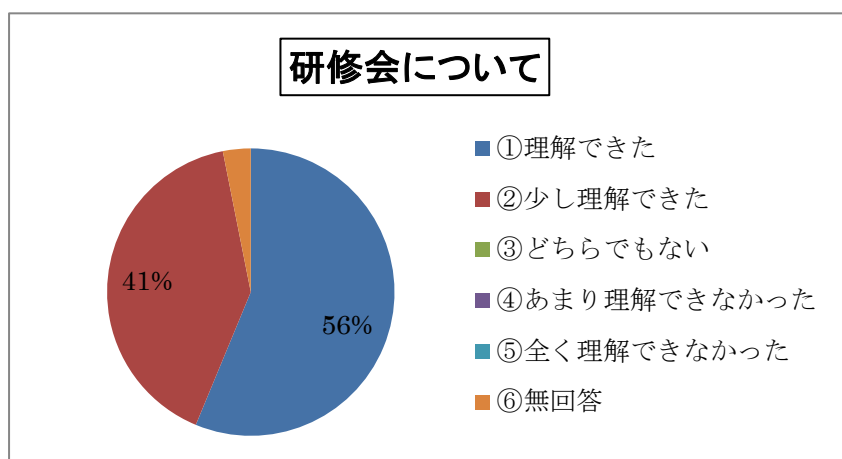


図3 「研修会はいかがでしたか」について

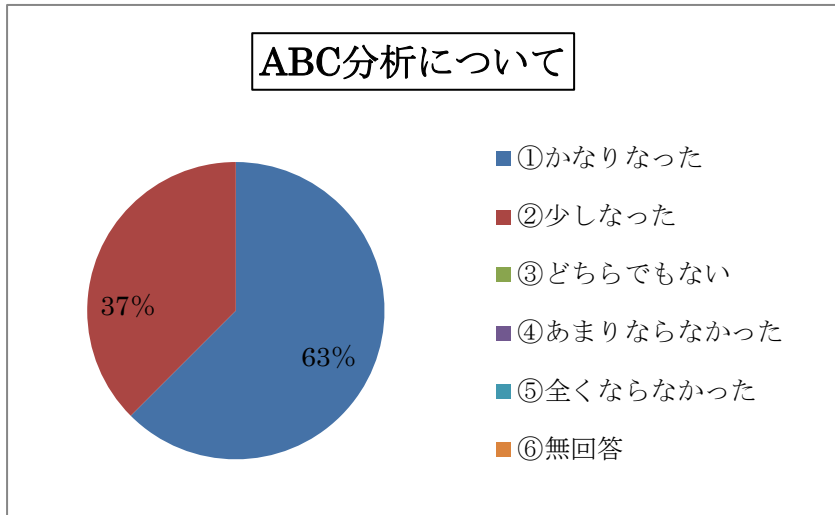


図 4 「ABC 分析の演習は参考になりましたか」について

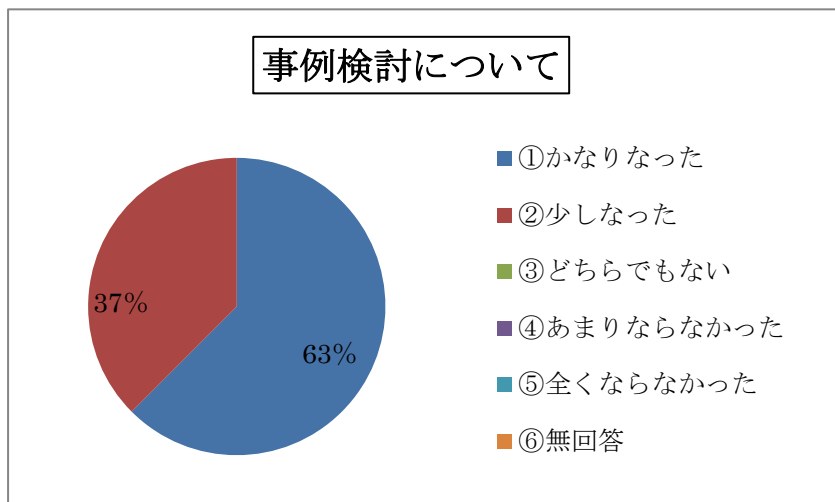


図 5 「事例検討は参考になりましたか」について

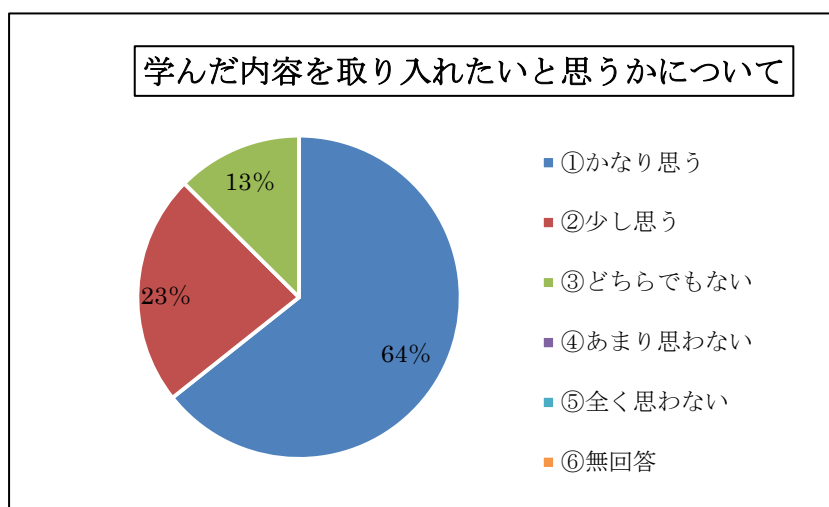


図6「学んだ内容を学校や事業所に取り入れようと思いますか」について  
図4の「ABC分析の演習は参考になりましたか」の主な具体的な内容を以下に示す。

- ・ABC分析の演習を通して、グループワークができたことが良かった。
- ・ABCフレームに、行動などを当てはめるプロセスが具体的に分かった。
- ・分析することにより、問題行動がなぜ起きるのか分かる。その為の具体的な支援を考えることができる。
- ・問題行動に対しての分析や対応策を見つけることができた。スタッフの主観ではなく、チームアプローチとしての客観的な行動判断ができるようになりそう。
- ・少し難しい場面や考え方などがあつたが、前回のアセスメントの取り方や今回の行動の理解を深めることができた。

図5の「事例検討は参考になりましたか」の主な具体的な内容を以下に示す。

- ・実際のABC分析をしやすくなった。
- ・事例検討していく手立てや考え方も少しずつ見えてきたような気がする。
- ・事例検討で実際に支援されている方と話ができた事は、とても具体的に考える事ができて面白く、参考になった。
- ・グループワークを通して、他の人の意見が聞けたり、違う考え方ができた事が良かった。
- ・特に意味もなく人を叩いているのではなく、意味があつて（それを誘発する行動があつて）起きているのだということが、ビデオを見たことで分かりやすかった。

図6の「学んだ内容を学校や事業所に取り入れようと思いますか」の主な具体的な内容を以下に示す。

- ・スケジュールの具体的な提示、事前予告。
- ・ABC分析をして、行動問題を具体化していきたい。
- ・行動問題の原因のまとめと対応策を考えるシートの活用。
- ・まずはABC分析、データシートの記入から行いたい。
- ・本人の問題行動と思っている部分も、支援者側のスキル不足という面もあると感じた。

図3の結果から、56%が研修内容は「理解できた」、41%が「少し理解できた」と回答しており、ほとんどの参加者が研修会内容は概ね理解できたことが分かった。

図4の結果から、63%がABC分析は「かなり参考になった」、37%が「少し参考になった」と回答している。そのため参加者全員が、ABC分析は、

今後の支援に活用できる内容であると認識していることが分かった。

図5の結果から、63%が事例検討は「かなり参考になった」、37%が「少参考になった」と回答しており、参加者全員にとって、参考になった事例検討であることが分かった。

図6の結果から、64%が今回の研修会で学んだ内容を今後の実践の中に取り入れようと「かなり思う」、23%が「少し思う」と回答しており、ほとんどの参加者にとって、現場に取り入れることができる研修会であることが分かった。その一方で、「どちらでもない」が13%であった。「どちらでもない」と回答した理由は、対象となる事例がないこと等であった。

## ② 研修会から3ヶ月後のアンケート調査結果

研修会から2ヶ月後の平成30年2月上旬に、研修会参加者全員にアンケート調査票を送付した。アンケート調査機関は、平成30年2月2日から2月22日である。アンケート配布数32、回収数20であり、回収率67%であった。

アンケート回答者の所属機関の内訳を、表3に示す。

表3 所属機関について

	児童発達支援センター	放課後等デイサービス	教育機関	福祉サービス事業所	相談機関	入所施設	その他	合計
人数	0	9	1	7	0	4	0	21

アンケートの結果について、図7、図8に示す。

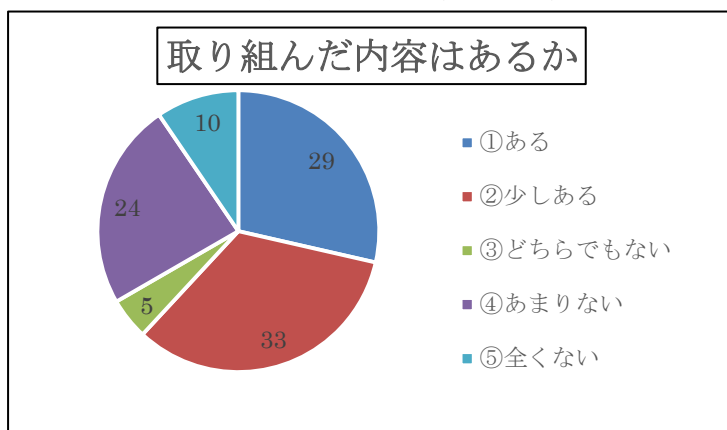


図7 前回の研修会を参考にして、学校や事業所の中で取り組んだ内容がありますか。

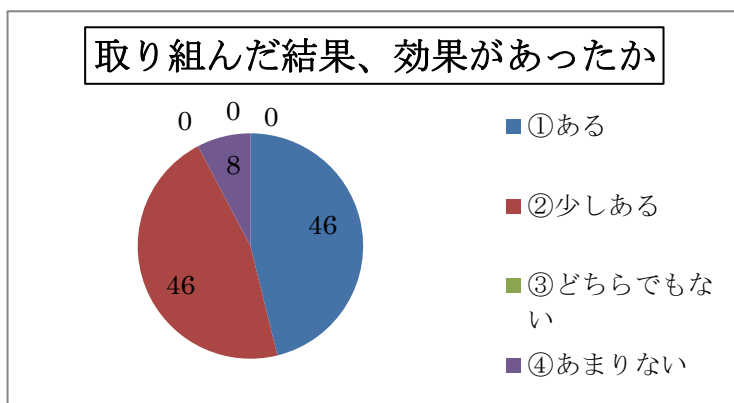


図 8 取り組んだ結果、効果がありましたか。

図 7 の結果から、学校や事業所の中で取り組んだ内容が、「ある」が 29%、「少しある」が 33%あり、回答者の 62%の参加者が、この研修会後に参考になった取り組みを実施していることが分かった。その具体的な取り組みの内容を以下に示す。

<学校や事業所の中で取り組んだ内容が「ある・少しある」の回答者の主な内容>

- ・ 絵カードを使って、スケジュールや当日メンバーを伝える。(多数)
- ・ 落ち着いて好きなことができる環境を整えるために、カーテンで区切り、刺激を減らす。
- ・ こだわりが強い物を視覚的に取り除く。
- ・ レスponsコスト
- ・ 昼休みのお楽しみ(電車 DVD)を電車の 6ピースパズルにして、行動問題(トイレに行かない)が生じたら、1~2ずつ取り去るようにした。
- ・ペアレントトレーニング
- ・ 事業所内のカンファレンスにて ABA 分析及び子どもたちの行動の理解。
- ・ ABC 分析
- ・ 活動の終わりを伝える方法としてタイマーを使用した。また、スタッフが 10 秒カウントした。
- ・ 望ましくない行動には無視をして、望ましい行動が生じるのを待った。
- ・ 行動問題が生じていない時に、何分かおきに賞賛する。
- ・ 「順番」が理解できるように、タイムタイマーと顔写真を使った。
- ・ 不適切な行動に対しては無視を徹底したため、一時期消去バーストが起き、他害行動や他児に向かって放尿するなどの行動が増加したが、現在は不穏になった時でも以前ほどの不適切行動はみられていない。
- ・ 偏食のある子どもへのオヤツの対応。食べない理由や好み、学校や家庭での様子を探ったり、オヤツの出し方、声かけを工夫した。



図7の結果から、学校や事業所の中で取り組んだ内容が、「どちらでもない」が5%、「あまりない」が24%、「全くない」が10%であり、回答者の39%であった。その具体的な理由を以下に示す。

<学校や事業所の中で取り組んだ内容が「どちらでもない・あまりない・全くない」の回答者の主な内容>

- ・ 職員配置の問題
- ・ 対象となる利用者がいなかった
- ・ 日々の業務で忙しかった
- ・ 対象者と継続して関わるのが少ない。

図8の結果から、学校や事業所の中で取り組んだ結果効果が、「ある」が46%、「少しある」が46%、「あまりない」が8%であり、ほぼ全員が効果を感じていた。その具体的な内容を以下に示す。

<学校や事業所の中で取り組んだ結果、効果が「ある・少しある」の回答者の主な内容>

- ・ 行動問題が減少した。（多数）
- ・ スケジュール提示により落ち着いて過ごすことができるようになった。
- ・ 本人が納得して、こだわり行動が終われるようになった。
- ・ 靴を触る行動が減少した。
- ・ トイレに閉じこもる行動が減少した。
- ・ 支援者もストレスが減少した。
- ・ 行動を問題として捉えるのではなく、先行事象があり、必ず理由があることを理解する。また、よい行動になるように、環境調整や関わり方を考えて支援できるようになった。
  
- ・ 支援員が声かけして促すよりも本人のストレスが軽くなったため、声かけよりも良い行動が増えた。
- ・ 切り替えがスムーズになった。
- ・ 望ましい行動をするのに時間はかかったが、無視をすることで自分で落ち着きを取り戻した。
- ・ 他児と一緒にDVDを観るという生活の一場面においては、多少の効果がみられた。

また、事後アンケート調査の項目「今後希望する研修や講師がありましたらお書きください」の主な記述を以下に示す。

<今後希望する研修や講師>

- ・ 家族支援について
- ・ 「行動問題の機能ごとの要因アセスメント」のような、チェックすることで実態や行動問題の要因がつかめるヒントになるものがあれば知りたい。
- ・ 成人以降で行動問題となりやすいケースの紹介と対応について
- ・ 利用者の客観的評価の研修会（遠城寺式、ABA分析など）
- ・ 具体的な道具作りや安く作れる道具の講座
- ・ 思春期の発達障害児への関わり方
- ・ 二次障害について
- ・ 個別支援計画作成のポイント
- ・ ABAについて詳しく学びたい
- ・ ABAについて事例検討を複数してほしい（複数）
- ・ ABC分析をすることによって、アンガーマネジメントやストレスマネジメントに応用できるのであれば知りたい。
- ・ 実践報告、発達障害児者の家族の話し
- ・ 入所施設での行動問題がある方への対応方法

③ フォローアップ研修会のアンケート調査結果

研修会参加者に研修終了直後、記入してもらった。研修会参加人数は24名であり、全員がアンケートを記入した。

アンケート回答者の所属機関の内訳を、表3に示す。

表4 所属機関について

	児童発達支援センター	放課後等デイサービス	教育機関	福祉サービス事業所	相談機関	入所施設	その他	合計
人数	0	12	0	7	0	3	2	24

アンケートの結果について、図5、6に示す。

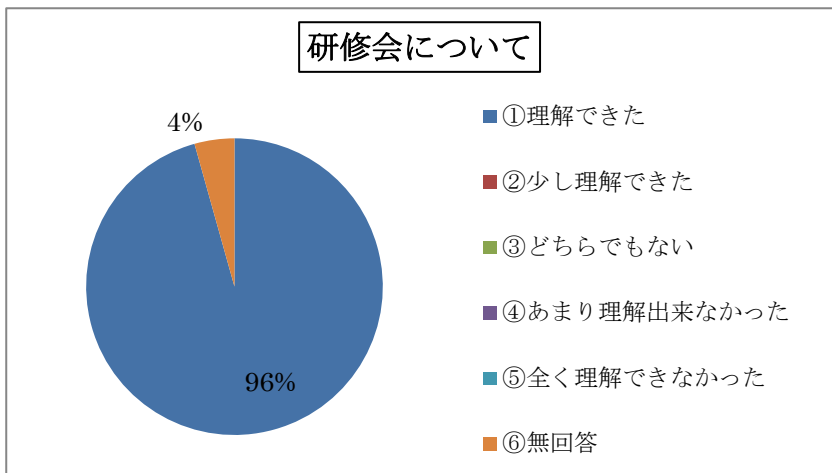


図 9 「研修会は理解できましたか」について

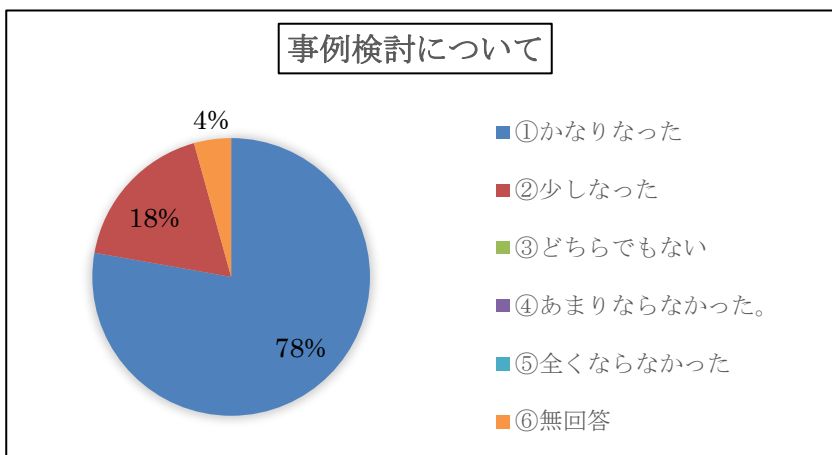


図 10 「事例検討は参考になりましたか」について

図 9 及び図 10 から、フォローアップ研修会は参加者は理解でき、参考になった内容であったことが分かる。

また、フォローアップ研修会アンケート調査の項目「全体的な感想や今後希望する研修や講師がありましたらお書きください」の主な記述を以下に示す。

- ・ 事例の中で、一つ一つできるようになる利用者の姿を実際に見ることができ、改めて支援の大事さ、支援の質の高さの大事さを考えることができた。また、できたときの喜びを感じた。今回の研修で、また明日から支援する喜びを感じながら働きたいと思うことができた。
- ・ 環境整備するにはチームワークが必要で、共通認識を持つということは、職員一人ひとりのスキルが必要だと強く感じた。事業所内だけで解決しようとせず、他機関への協力を求めることも考えていけるといいなと感じた。今後も、様々な事例検討、研修を受けてみたい。

## 2. 考察

今年度は昨年度の反省を基に、行動分析に関する基礎講義と事例検討の演習

にそれぞれ1日ずつ、また、参加者からの実践報告を行うフォローアップ研修会を半日行うようにした。また、参加条件として、「発達障害や応用行動分析の基礎知識がある」市内の福祉サービス事業所や教育関係者とした。加えて、行動障害のある人に対する医療や感覚統合の基礎知識があることが望ましいとした。結果的には条件を全て満たしている参加者ではなかったが、事例検討協力児が通う放課後デイサービス事業所からの参加者が多く、研修会2日目の事例検討にて協議した対応方法を参考にして、事業所内で取り組み、効果を感じていた。

研修会当日のアンケート調査では、自分の現場に取り入れたい内容は、「スケジュールの具体的な提示、事前予告」「ABC分析をして、行動問題を具体化する」「行動問題の原因のまとめと対応策を考えるシートの活用」等であった。

事後アンケート調査で実際に取り入れている内容は、「スケジュール」「視覚的支援」「刺激の制御」「レスポンスコスト」「ABC分析」「タイマーの使用」「ことばかけの工夫」「ペアレントトレーニング」等であり、当日アンケート結果と同じ内容が多かった。また、取り組んだ参加者のほぼ全員が効果を感じており、対象者の行動問題が軽減したと回答している。その多くは、事例検討協力児が通う放課後デイサービス事業所職員であった。

反面、事後アンケート調査では、回答者の35%が研修会で学んだ内容を実践していなかった。その理由として、対象者がいなかったこと、日々の業務で忙しかったこと、職員配置の課題等があがっていた。

今年度は3回シリーズで研修会を行い、事例検討協力児の所属機関に参加を呼び掛けた。その結果、放課後デイサービス事業所からの参加が多く、このことが事業所全体で共通理解した取り組みを可能にしたものと考えられる。また、基礎知識の講義と事例検討に一日ずつ時間をかけたことが、有益なグループ討議ができた要因の一つと考えられる。加えて、今回初めて市長名で修了証を発行したことが、3回共参加する受講者が増えた要因の一つと考えられる。

参加者からは対応困難事例に対する効果的で具体的な支援方法を学ぶ研修会を望む声が多かったため、今後も実践報告や事例検討等研修会を継続することが必要と考えられる。また、研修会に参加した一部の職員だけが取り組むことは限界があるため、職員全体が共通認識を持つためにも、福祉サービス事業所に対する機関コンサルテーションを強化したい。加えて、「発達障害者支援のための初級セミナー」や「構造化セミナー」、「実践報告会」等各種研修会を促進し、市内全体のスキルアップを目指したい。